

戦中・戦後の砂防と赤木

勅任官に任命



昭和11年(1936)11月、赤木は林学士からの初の勅任技師(高等官二等)に任命され、砂防関係では初めての勅任官となった。

後年、当時の土木局長 岡田文秀¹⁾は「赤木正雄先生追想録²⁾」の中で、『…赤木君があれだけの努力で内務省の砂防を築き上げることに成功したのも、その仁義に厚い人格が然らしめたものと思っている』と述べている。

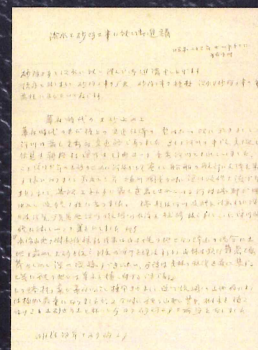


岡田文秀
明治25年(1892)~平成元年(1989)
内務省河川課長、千葉県知事、
内務省衛生局長・土木局長、
長崎県知事・厚生次官など、¹⁾

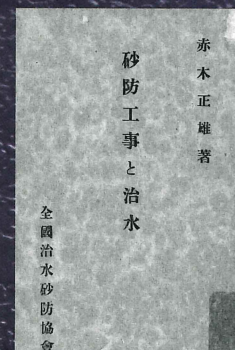
◀ 勅任官の礼服を着用した赤木正雄

天皇陛下へのご進講

赤木が、昭和23年(1948)年11月、宮中において天皇陛下に「砂防工事と治水」についてご進講をしたところ、陛下の熱心な質問等があり、1時間半の予定が3時間にも及んだ。その骨子は、砂防協会発行の小冊子にまとめられた。⁴⁾



赤木のご進講原稿



原稿冊子

当時参議院議員で砂防協会理事であった河井彌八は、この冊子の序文で、
「天皇陛下からこのあいだの赤木博士の砂防に関する講話は実に有益であった、とのご満足の御言葉でありました。又、博士御進講の内容が、治山治水の根本に亘って極めて該博的確であったことが、畏きお言葉の中に拝せられました」と記している。

内務省退官と砂防協会の日々

昭和16年(1941)9月、戦時体制をとるために土木局は国土局に改組され、砂防を専管する第3技術課は廃止となり、砂防事業は河川課に移管された。

赤木は、河川課の中の砂防担当勅任技師に戻り、引き続き全国の砂防を統括する。昭和17年(1942)3月、内務省を退官、その後任として、遠藤守一内務技師が引き継いだ。

退官した赤木は、日々溜池にある三会堂ビルの中の砂防協会事務室に通い、同じ頃内務大臣を退任していた末次信正会長とともに砂防事業を進展すべく懸命に努力した。



遠藤守一
明治21年(1888)~昭和31年(1956)
農商務省から内務省技師となる。
東京土木出張所常任土川上流工事
事務所長。内務省国土局砂防担当
勅任技師。¹⁾

ローダーミルクとSabō

昭和26年(1951)1月、GHQはアメリカの大統領直属の最高技術委員会委員長のウォルター・C・ローダーミルクを「水資源と土地利用」の専門家として日本に招聘した。

ローダーミルクは各地を視察する中、カスリン台風で大きな被害が出た利根川とその上流の赤城山の災害に大きな関心を示し、当時参議院の建設委員長だった赤木と懇談・議論を繰り返し、昭和26年(1951)4月、帰国前に赤木との懇談で、「砂防」を国際語にすることを提案した。⁹⁾

そして、約束通り昭和26年(1951)8月ブリュッセルの国際水文学会で「SabōWorks」を世界共通語にと提案し、それ以降“SABO”は世界で使われる共通の言葉となった。

「ローダーミルク博士 招待会」



日本河川協会主催
昭和26年4月5日午後1時
上野精養軒にて¹⁰⁾
赤丸：ローダーミルク
青丸：赤木と思われる



Walter C. Lowdermilk

W. C. Lowdermilk :
ノースカロライナ州。明治21年(1888)~昭和49年(1974)
昭和26年(1951)GHQの招きで来日、¹¹⁾帰国後国連で水問題に関わる森林・土地・水保全の専門家
昭和15年(1940)連邦林務局土壌保全局長
土壌保全局設置(1933)・土壌保全法(1935)・洪水防除法(1936)の制定などに従事¹²⁾

荒廃が著しい溪流において日本ほど丁寧に、また必要などころには投資して対策を実施している国を私は知らない。「砂防堰堤」は水や土砂の貯砂機能よりもむしろ渓床・溪岸侵食を軽減するよう設計されている。この種の荒廃溪流の仕事は「Sabō Works」と呼ぶことをこの場で提案したい。

The author knows of no country that has carried out such elaborate and costly works of reducing stream erosion in mountain valleys as has Japan. The Sabō dams are designed primarily to reduce stream erosion rather than to store water or erosional debris. For this reason, the author would like to propose that this type of torrent and mountain stream control be called "Sabō Works".

ローダーミルクの提案¹¹⁾

戦争と砂防事業の停滞

戦争が激しくなると共に、砂防事業も停滞したが、赤木は『大戦中といえども災害防止による国民生活の安定と国土の保安を旗印に相当額の砂防事業を施行し得たことは、末次会長と砂防協会関係者の努力に負うところが多かった』と、のちに著書「砂防一路」で述懐している。³⁾

戦後の砂防事業の実施体制

昭和20年(1945)8月15日終戦を迎えると、GHQ(連合国軍最高司令官総司令部、General Head Quarter)が設置され、内務省の公共事業はその指揮下になった。敗戦直後の昭和20年(1945)9月枕崎台風や昭和21年(1946)南海地震、昭和22(1947)年カスリン台風など、数々の災害が荒廃した国土に甚大な被害をもたらしたため、砂防等の治水事業は急速に進展するとともに、組織の改組も力強く進められた。

赤木は国会議員への道に

赤木は、昭和21年(1946)に貴族院議員に勅選され就任、その後、貴族院は廃止され、昭和22年(1947)の第1回参議院議員選挙に兵庫地方区から立候補し当選、昭和25年(1950)の選挙で再選を果たした。これまで内務技師として砂防事業促進の論議に力を注いできた赤木は、今度は自ら政治の世界に身を投じ、国会議員の立場で国政全般はもちろん砂防進展の活動を行っていった。

しかし、昭和31年(1956)の選挙で再選はかなわず、在職約10年で国会議員を退任した。在職中、赤木は貴族院で「国土計画審議会臨時委員」、参議院では「国土計画委員長」・「建設委員長」・「立太子の礼及び成年式につき奉る賀詞案起草特別委員長」などを歴任し、政府では建設政務次官に就任した。

そして、国会の質疑に貴族院で15回、参議院では360回あまり立っている。²⁾

参議院国土計画委員長

昭和22年(1947)、東日本で大災害を引き起したカスリン台風などの災害に際し、赤木は第1回国会の参議院本会議(昭和22年9月30日)で参議院国土計画委員長として、『水害に対する迅速な応急策と治水事業の完遂に関する決議』を提案し決議された。これは、参議院の第1号の決議と言われる。³⁾

治山治水基本対策要綱制定に尽力

昭和28年(1953)は全国で数多くの災害が発生し、政府は抜本的対策を図るために同年8月「治山治水対策協議会」を設置し、赤木は学識経験者委員として参画した。

そして、赤木の努力もあり、同年10月に砂防重視が色濃く出された「治山治水基本対策要綱」(昭和29(1954)年から10ヵ年の計画)が策定された。³⁾この要綱では、砂防事業費は河川全体事業費の32.7%を占める画期的な計画であったが、同時に予算措置が講ぜられなかったため、正式な政府決定に至らなかった。

しかし、建設省の最も根幹的な計画として扱われ、戦後の治水事業において極めて重要な意義を持つものとなり、¹³⁾昭和34(1959)年の治山治水緊急措置法や治水特別会計法、治水5ヵ年計画に引き継がれていった。

こうして、赤木は参議院を去っても学識経験者として、また砂防協会の常務理事として、国会での砂防進展の議論に積極的に参画したのである。

次回は「砂防会館の建設」

<参考文献>

- 1) 藤井肇男：土木人物事典、アテネ書房、2004.12
- 2) (社)全国治水砂防協会：赤木正雄先生追想録、1973.9
- 3) 赤木正雄：砂防一路、(社)全国治水砂防協会、1963.7
- 4) 赤木正雄：砂防工事と治水、(社)全国治水砂防協会、1949.3
- 5) (社)全国治水砂防協会：五賢者の砂防遍歴、パンフレット、1967.5
- 6) 朝日新聞：現代日本朝日人物事典、1990.12
- 7) 入江相政：入江相政日記第2巻、朝日新聞社、1994.9
- 8) 千石雅人：昭和天皇実録第十、著作権者宮内庁、2017.3
- 9) 赤木正雄：ワルター・ローダーミルク氏と砂防を語り、帝国ホテルにて、砂防協会資料、1951.4
- 10) (社)日本河川協会：河川、口絵、1951.5
- 11) W. C. Lowdermilk : Problems in Reducing Geological Erosion in Japan, IAHS Assembly, Generale de Bluxelles 1951, Publication No. 33, 1951.6
- 12) The New York Times : Walter C. Lowdermilk, Conservationist, Is Died, Thursday, 1974.5
- 13) 建設省五十年史編集委員会：建設省五十年史、1998.7